

プラナリ・アドラコ星人作 精神分裂型漫画小説『未来人』～哀しんでいる時のあなたが大好き I love you in your sadness. ～
8歳年下のデスコルの妹、マドレアの恋。少女時代の終わり。そして結婚。

登場人物

マドレア・デミロード セヴァスチャンを好きになり、彼の屋敷に通う。彼との結婚生活を夢見ている。

フレッド マドレアの二歳年上の兄。フレッドというのは呼び名。セヴァスチャンの日記の編集をしている。

セヴァスチャン・ヴルーベリ 旧人類。300年以上生きている。フレッドが通っていた学校と、そこら一帯の広大な土地の所有者。学校の近くの豪邸に一人で住んでいる。

ルーン・びよん吉 セヴァスチャンの一つ下の弟で、妖精。ウサ耳と尻尾のあるバニーボーイ。翼も生えている。

ニコル・レンフェルト 妖精で、分裂できる。フレッドの婚約者。

エルリック・レンフェルト ニコルの傍ら。彼女と結合するとフェイイルヴェルクに。

フェイイルヴェルク・レンフェルト ニコルとエルリックが融合した姿。

エクレア・デミロード フレッドとマドレアの母。エレンと呼ばれている。

ハドロン・デミロード フレッドとマドレアの父。

ミン・ローウェン フレッドの中学部時代の友達。女なのに男子校に通っていた。本名は、ミン・ユーリン。

エール・うさえモン セヴァスチャンの父親。彼が100歳の誕生日の時に、フェアリーランドに帰った。

マリーナ・ヴルーベリ セヴァスチャンとマドレアの娘。旧人類。

スターリング・エンフィールド フレッドとニコルの息子。妖精。

未来人 養子として来た、カロンの息子。

マドレア1

初めて彼に会ったのはまだ十歳の時だった。兄は何も言わずに私の手を引き、彼の学校の近くの立派な屋敷に連れて行った。

「わー、なんて広い家なんだろう！一度でいいからこんな家に住んでみたいなー。」

屋敷に入ったのは、その掃除をするためだった。屋敷には兄が通っている学校の校長が一人で住んでいた。校長と言っても、おじさんではなく、若く、実を言うと子供だった。だが、子供なのに落ち着いていて、上品で、不思議な雰囲気をもった人だった。彼の名前はセヴァスチャン・ヴルーベリと言った。

兄が私をここに連れてきたのは間違いだっただけで、私はまともに掃除をせずに、屋敷の中を眺め回っていた。この屋敷は石造りの3階建てで、全体的に重苦しく、暗く、茶色がかっていた。玄関は吹き抜けになっていて、天井から淡い光が漏れていた。壁という壁には絵画が無数にかけられていた。壁や天井、床には細かい装飾がほどこされていて、屋敷というよりも、美術館だった。一つ一つの部屋が広いのは勿論だが、それぞれの部屋にカーテンのかかったベッドと8人掛けの机と、クローゼットと、その他の家具があった。書斎は、図書館のようで、本棚が、何列も並んでいた。ただし普通の本棚と違って、棚に本が直接入っていない、箱が並んでいた。箱を開けると、その中に種類別に分けられた本が入っていた。もちろん、箱の一つ一つに何が入っているのか、見出しがついていた。トイレは各階に二箇所ずつあり、それぞれが私の部屋くらいの広さだった。風呂場は1階にあり、私と兄の部屋を足した位の広さの湯船と、普通の大きめの湯船とが隣接してあった。ダンスホールらしき部屋があったが、使われていないようだった。食堂は、約50人が一斉に顔を合わせられるくらいの広さだったが、そこも使われていないようだった。厨房も広く、一度に多くの料理が作れそうだったが、一人分の食事しか作っていないらしく、生ごみが多かった。広い庭もついていたが、荒れていた。

私はこの広い屋敷を駆け回っては、時々視界に入る兄の学校の校長先生を眺めていた。彼もこの屋敷同様、珍しい存在だった。私は兄の掃除の手伝いをしなかったので、家に帰った後で叱られた。

「ね！また遊びに来てもいい？」

私は、帰り掛けにそう尋ねた。

「いいですよ。いつでも、あなたの好きな時にいらして下さい。」

それから私は主に学校の帰りに彼の屋敷に行った。私は彼を『セヴァスチャン』と親しみを込めて呼んだ。彼も『マドレア』と呼んでくれた。

彼の屋敷は広い。私は彼に内緒でよく屋敷の中を探検した。引き出しを勝手に開けても、廊下をバタバタ走っても、怒られた事はなかった。

それは屋敷の中でピアノを発見した時のことだった。

「わー！ピアノがあるんだ！しかも音楽室にあるようなでかいやつ！すごい！
ねえ、演奏してもいい？」
彼はうなずいた。

「わー・わー・わー」

私は重い鍵盤をバンバン叩いた。重苦しい音が、部屋中に響き渡った。セヴァスチャンは笑い出した。

そして、彼は両手を私の手の上に乗せ、私の指を操り、私の指の上から鍵盤を弾いた。

「あー弾けてる！」

私は思わず後ろを振り向いた。その時初めて彼の顔を間近で見た。

『なんてきれいな顔をしているんだろう！』

私は彼の顔に釘付けになってしまった。たぶんその時から私は、彼に心を奪われていたのだろう。

フレッド1

僕が聖ブラネシアン・ヴルーベリ男子学院の中学部に通っていた時、隣の席のミン・ローウェンが男ではなく女だと知ってしまい、校長先生に呼び出された。女だと知られたローウェンは、退学となる約束だったらしいが、どういわけか僕が怒られてしまい、中学部卒業まで彼女の秘密を守らねばならなかった。中学部を卒業し、ローウェンは女子学院に移ったが、その場に残った僕は、気がついたら校長の言いなりとなっていた。

セヴァスチャン1

来てくれた客に、「また来てください」というのは、礼儀でもあり、決まり文句でもある。マドレアは今日もこの家を訪ねてきた。彼女は学校の帰りに、毎日のようにこの屋敷に来ている。

「こんにちは！」

「こんにちは。」

いつもより少しばかり遅くやって来た彼女は、大きなカバンを持っていた。

「そんなに重いカバンを持って来てどうしたのですか？」

「家出してきたかった！」

彼女は笑いながら言った。

マドレア2

ニコルという兄の婚約者が突然やって来て、一緒に住むようになり、しばらくすると、眠れない夜が度々訪れるようになった。私の部屋の隣は兄の部屋であり、毎晩その部屋から例の物音が聞こえるのである。最近は特に激しさが増してきたので、たまりかねてこうやって家出してきたのである。

「ねえ、いいでしょ？今晚泊めてよん。」

「私はかまいませんけど、家族の方には言ってきましたか？」

「は？言ってくるわけじゃないじゃん。断ったら家出にならないもん。あ、でもエルリックには言ったかな。行く前に会ったから。これもあれも皆ニコルとお兄ちゃんが毎晩煩いからだよ、って言ってるよ。」

あたし信じられない。何でSEXなんてしなきゃなんないの？

「別にする必要はないですよ。あなた方は。」

「じゃあさ、何でセヴァスチャンは誰ともSEXしないの？」

「一度でもすると覚醒してしまいますからね。」

セヴァスチャン2

旧人類は、ある程度成長してしまうと一時的に成長が止まる。そして、性行為をすると、覚醒し、再び成長を始めるのである。覚醒さえしなければ、何百年でも生きられる。これは、確実に子孫を残すためのものだと言われているが、覚醒した後、妊娠するまで3～5年もの間は、毎晩性行為を繰り返さなければならぬ。プラネシアン教関係の学校が共学でないのは、旧人類の覚醒後の行いを恥じた事に由来する。童貞や、処女でないと聖人になれないのも、同様の理由からであった。

私の母親も旧人類だったが、父親は妖精だった。妖精と人間との間に生まれた子供は妖精になるはずだが、私は珍しく人間として生まれた。すぐ後に誕生した弟は妖精として生まれた。妖精は100歳になると一人前として認められる。人間はとくに死んでいる年である。父は私の100歳の誕生日の日に、弟を連れてフェアリーランドに帰って行った。

マドレア3

今まで何回もセヴァスチャンの屋敷に行っているが、こうやって彼の屋敷に泊まるのは初めてのことだった。今こうして空き部屋のベッドの中に潜っているが、これと同じようにベッドのある空き部屋があと53部屋もあるというのは、驚くべきことであり、うらやましくもある。今寝ている部屋は、私の家がまるまる入ってしまうくらいの広さだった。屋敷の中は暗くて、寒く、毎晩騒音を聞きなれているせいもあるが、静かすぎて怖いくらいだった。ベッドに入り、40分位経ったが、眠れないので、セヴァスチャンの寝室へと向かった。別に何かしたかったわけではないが、退屈で死にそうだったのだ。

セヴァスチャン3

私が寝ていると、マドレアが起こしにやって来た。

「どうかしたのですか？」

「眠れないの…」

彼女は左手に枕を持っていた。私は仕方なく、彼女と同じベッドで寝ることにした。

「ねえ、何でセヴァスチャンは髪をのばしているの？」

「特に理由はありません。ただ小まめに切るのが面倒なだけですよ。」

翌日、私は彼女を家まで送った。彼女の兄のフレッドはえらく迷惑そうに私を見ていた。

フレッド2

僕は中学部を卒業した後、終学部に進学した。学校は1月から始まって、5～10歳までは初学部、10～15歳までが中学部、15～20歳までが終学部となっている。両親は二人とも中学部を中退しているものだから、僕には終学部まで行ってもらいたかったらしい。親の期待に答えたのではなく、働きたい仕事になかったというのが、終学部に入った理由だった。

順調に15歳で終学部に進学できたのだが、16歳の頃から学校に行きたくなくなり始めて、17歳の半ば頃には学校を中退していた。両親に怒られると思ったが、二人ともひどくがっかりしていたので、悪いことをしたなどは思っていない。

学校をやめた理由は、勉強する気力がなくなったこと、神を信じている自分に疑問が出てきたこと、ニコルが自分に許可なく妊娠してしまったこと、ブルーベリ校長のいる学校に通うのが嫌だったことなどがあげられる。しかも、マドレアはブルーベリが好きらしく、頻繁に彼の屋敷に通っている。やめてもらいたい。

セヴァスチャン4

フレッドが学校を中退した。中途半端な時期にやめたので、働き先はなかった。少なくとも、彼向きの仕事はなかった。元々彼は夢も目標も持たずに生きてきた男なので、学校を中退しても、何もすることがなかった。そんな彼に私は特別に仕事を与えた。今まで300数年間、日記を書き続けているが、それを本にするため、彼には学校の印刷所で働いてもらうことにした。

彼は嫌がった。同級生は同じ学校で授業を受けているのに、学校内の印刷所で働くなど耐え切れなかったようだ。その上、私の日記を100部ずつ作るのは馬鹿らしいとさえ言っていた。私はエルリックにも働いてもらうことにした。フレッドが中退したのはニコルの所為であると言い切ってよく、彼女が妊娠中の今、その責任をエルリックにとってもらうことにした。もともとフェイイルヴェルクという一人の妖精が分裂して男女に分かれたと聞く。あの3重人格妖精は使えると思った。

マドレア4

私も14歳になり、来年は中学部を卒業してしまう。私が通っている学校は、宗教学校ではないので、共学であり、学費もやや高めである。終学部には行く予定はない。今から行くうとしても、準備が間に合わないのだ。

最近晩飯になると、家族の皆からこう聞かれる。

「卒業後はどうするつもりなの？」

「うーんと、お嫁さんになるの♡」

「誰のだよ…」

決まっていたため息が返ってきた。自分がここ数年結婚できそうもないことは分かっているが、ふざけて『お嫁さんになる』と言ったわけではない。私は大分前からセヴァスチャンと結婚して、マドレア・ヴルーベリとなって、家族皆である屋敷で暮らそうと思っていた。夢見ていた。

ぴよん吉1

僕の名前はルーン・ぴよん吉。こう自己紹介すると、決まって『変な名前だね』と笑われる。僕の頭にはウサ耳があるが、背中には羽もついている。ウサ耳妖精の名前の特徴は、前にウサギに関連する言葉が出てくることだ。ミミー、うさ子、バニ男などである。ちなみに父の名はエール・うさえモン。最初の名前も真ん中の音が伸びる事になっている。

父は兄さんが100歳の時以来彼とは会っていないが、僕は暇なので、時々兄さんの家に遊びに行っている。突然現れると驚かれるので、いつも彼の部屋の鏡の中から登場するようになっている。

最近兄さんの家に通っている人間の女の子がいるが、彼女はどうかやら兄さんが好きらしい。彼もまんざらでもなさそうだ。兄さんもとうとう覚醒してしまうのだろうか？

マドレア5

今日はいつもより二時間ほど早くセヴァスチャンの家に着いた。玄関の所で彼の名前を呼ぶと、いつもなら目の前の階段を上がってすぐの彼の部屋から彼が出てくるのだが、今日は出てこなかった。不思議に思っ彼部屋のドアを開け、中に入ってみると、部屋の中に彼がいた。

「こんにちは、セヴァスチャン。」

「こんにちは、マドレア、今日も可愛いね。」

彼はにっこりとしてそう言った。いつもの彼なら決してそんなことは言わないのに…。私は赤くなってしまった。

「顔が赤いけど、大丈夫？」

次の瞬間、私はセヴァスチャンの両腕の中にいた。まるで、白昼夢を見ているかのようだった。

「大丈夫、大丈夫だから。」

軽くセヴァスチャンを押しつけて言った。これではこっちが覚醒してしまう。

「ねえマドレア、今日は一つ重要な提案があるんだけど、聞いてくれないかな？」

「何？重要な提案って。」

「君はもうすぐ卒業だったよね？」

「うん。」

「だったら僕のところへ来ない？」

「僕のところって、どういうこと？」

「勿論、結婚してくれって言っているんだよ！」

目の前が真っ白になった。何度もイメージ・トレーニングはしていたが、実際に彼の口からその言葉が聞けるとは思わなかった。『結婚しよう』という言葉だけで昇天してしまう勢いだった。

「ねえ、本当にあたしなんかと結婚してくれるの？」

下手したら自分から『結婚しよう』と言ってしまうかもしれないのに、彼からそう言うってくれるなんてまるで夢のようだった。

「君、僕の事を疑っているんだね？いいよ、じゃあ、証拠を見せてあげるよ。」

そう言うときセヴァスチャンは引き出しから小箱を出し、中の物を取り出した。

「わー、すごく大きな宝石のついたネックレスだ！」

彼はそれをマドレアの首にかけた。

その時は幸せの絶頂にあり、セヴァスチャンの言葉遣いがいつもと違うことにまったく気づかなかった。

セヴァスチャン5

入浴後に部屋に戻ると、マドレアが中にいた。

「マドレア：来ていたのですか。」

「ねえ、結婚したら家族をここに呼んで皆で一緒に住んでいい？」

「…それはかまいませんけど、そうする必要がありませんか？」

「あるわよ。こんな広い家に二人きりなんて淋しいじゃん！」

マドレアはすっかり興奮していた。彼女は今さっき私にプロポーズされたのだ。だが、私はその時入浴中だった。しかし、彼女は本当に私にプロポーズされたようにふるまっていて、彼女の頭の中もまた、その時の光景でいっぱいだった。

ふと、彼女の胸で輝く宝石が目に入った。

「これは…。」

「あ、これありがとう！あたしこんな高価なものもらったことないから、すごくうれしい。ありがとう♡」

「あの一。私あなたにあげていませんけど。」

「え？だって結婚してくれる証拠にくれるんでしょ？」

「いえ。それにプロポーズもしていません。」

「ええっ！でもさっき結婚しようって言うてくれたじゃん！」

「でも言うていません。」

「騙したのね！」

「騙してなんか……」

「あたし、本当にうれしかったんだから、それなのに嘘だったなんて！」

彼女は顔を真っ赤にして、今にも泣き出しそうだった。

「さっきの私は本当の私ではなかったのですよ。」

「何言ってるの！じゃあ誰だって言うのよ。」

「……びん吉」

びん吉2

「どーも、びん吉です！」

僕は二人の前に登場した。

「誰この人。」

「私の弟です。」

「弟がいたんだ。」

「はい。で、さっきのは彼の仕業です。」

「そーでーす！ごめんなさい。だってさ、君は兄さんが好きみたいだし、兄さんも君のことを想っているみたいだし、二人が結婚しちゃえばいいんじゃないかな？って思ったんだよね。で、さっき兄さんに変身して、君にプロポーズしたって訳！兄さんの代わりにね。ほら、僕って変身能力があるからさ！」

そう言っ僕は兄さんに変身した。

「そう……じゃあさっきのは彼が？」

マドレアは、すっかり元気をなくしていた。

「すみません、本当に。」

「もういやー！」

マドレアは泣きながら走った。

マドレア6

私は嘘のプロポーズで舞い上がってしまったことを恥じ、一刻も早くこの家から立ち去りたかった。

「待って！」

びん吉にすぐに腕をつかまれてしまった。彼の頭にはウサギの耳がついていて、背中にも羽らしきものがついていた。

「余計なこととしてごめん！さっきの事は謝るから、兄さんの事、嫌いにならないで！」

びよん吉は私の腕を握ったまま、頭を下げた。こんなに一生懸命頭を下げられた事がなかったので、かえって恥ずかしく思えてきた。

「嫌いには…ならないわ。」

「そうだよね！君は兄さんの事が好きだからね！兄さんも口にはしないけど、そんな君が大好きなんだよ？」

びよん吉のその言葉に、私もセヴァスチャンも真っ赤になった。

結局ネットレスは返すことにした。次の日はセヴァスチャンの家に行くのをやめようと思ったが、行くことにした。

セヴァスチャン 6

びよん吉が言うように、マドレアが私を好きなのも、私がマドレアを好きなのも、当たっていた。だからと言って、彼女と結婚するつもりはない。彼女と結婚したくないわけではない。ただ、私は今のままの状態を望んでいるだけなのだ。

それに対し彼女は、私同様、今の状態を保とうとしながらも、心の中では別世界にいた。最近彼女はよく妄想する。今もこうして紅茶を飲みながら、将来私と結婚した時の事を思い浮かべていて、時々過激な内容にまで発展する。それは彼女くらいの女の子には皆あることで、いたって普通である。しかし、できれば知りたくなかった。

マドレア 7

私は最近夜になると聞こえてくる妙なあえぎ声に合わせてオナニーしている。もちろんセヴァスチャンの事を考えてやっている。彼とはげしくプレイしている姿を思い描きながら、指でクリトリスを刺激した。

セヴァスチャンは人の心が読める。なのに私はよく彼の目の前で彼にレイプされているシーン等を思い浮かべている。彼は普段通りに接している。どうして彼は何もしてこないのだろうか？私は彼にキスさえされたことがなかった。

「セヴァスチャン、好きなの。愛しているの。だからキスして。」

ある日、我慢できなくなつてそうつぶやいた。

「キスしたら覚醒してしまいますよ？」

「嘘！」

「嘘ではありません。」

「覚醒してもいいから！」

「…嫌です。」

「あたしの事が嫌いなのか？」

「いいえ。嫌いならこの家に入れませんかよ。」

「ねえ、キスだけでいいから！お願い！」

「……………」

「ねえ、あたしセヴァスチャンが好きなの！キスして欲しいの！ねえったら！」

「我慢してください。」

「イヤッ！」

「では今日はもう帰ってください。」

「セヴァスチャンの馬鹿！大っ嫌い！」

明日あたしが死んだら、何十年後にきつと今日のことを後悔するわ！『あー、あの時キスクらいしてあげればよかった』ってね！たとえ明日死ななくても、あたしが他の男と結婚しちゃっても知らないから！」

私は走って彼の屋敷を出て行った。彼は追って来なかった。

フレッド3

今日マドレアは帰ってくるなり、テーブルの上に顔を伏せて泣き出した。彼女があんなに激しく泣くのは久しぶりだった。

「ヴルーベリに襲われたの？」

半ば笑いながら尋ねた。

「違う！その逆なの！」

「逆？」

「彼は何もしてくれないの！」

「そりゃ、何もしてくれないよ。」

「何で？」

「死にたくないんだろ？やめなよ、あんな奴。」

マドレアは再び泣き出した。

「もうヴルーベリの家なんかに引っっちゃだめだよ。明日は誕生日なんだし、寄り道しないで帰ってきてよ？」

マドレアは涙を拭い、頷いた。

しかし、彼女は次の日もヴルーベリの家に行った。

マドレア8

私は昨日、二度とあの家には行かないと決めた。しかし、学校が終わり、家に帰る途中、少しくらいならあの家に寄ってもいいような気がしてきた。

私は呼び鈴を鳴らさず中に入った。最近はいちいち呼び鈴を鳴らしていない。中に入った方がいいが、彼には会いたくなかった。なので、そっと空き部屋に入り、ベッドに入って寝ることにした。そして夜になった。

どれほど眠っただろうか？ふと、体を起こすと、部屋の中央に配置している机にセヴァスチャンがいた。彼は照明もつけずにそこにいた。彼は何もしていなかった。ただ、目を開け、こちらをじっと見ていた。怖かった。

「…こんばんは。」

小声でそう言うと、彼が近づいてきた。

「こんばんは。」

叱られるかと思ったが、彼は優しい目をしていたのでホッと、思わずこう口走った。

「あのね、今日はあたしの十五歳の誕生日なの。」

「知っていますよ。よく『もうすぐ誕生日なんだ』って言っていましたからね。」

「プレゼントちょうだい！」

そう言うと彼は、私にプレゼントをくれた。

私は急いで包みを開け、中の物を取り出した。

「わーワンピースだ！ありがとう！」

フリルとリボンがたくさん付いた、花柄のワンピースだった。私はフリルの服に憧れていたが、似合いそうもないし、恥ずかしかったので、本当に小さい頃以来着ていなかった。だが、彼が用意してくれたワンピースは着てみたいと思った。私は彼に後ろを向いてもらい、着替え始めた。背中のファスナーを上げてもらうのだけ、彼にやってもらった。その時でさえ私は、彼に後ろから胸を触られたらどうしようか、考えていた。

「ねえ、似合う？」

私はスカートを広げ、軽くお辞儀した。

「とても良く似合っていますよ。」

セヴァスチャンは言った。

私は彼を上目づかいで見、心の中で『好き！』と言った。

セヴァスチャン7

最初、マドレアはそれほど大きな存在ではなく、『客人』以外の何者でもなかった。だが、彼女は私に恋愛感情を抱き、私は彼女の想いによって彼女を意識し始めた。私は彼女を使って覚醒するつもりはなかった。彼女とはこのままでいたかったのだ。

だが彼女は今のままの関係を望まなかった。彼女は私を愛し、その愛は時間が経つに連れ、精神的なものから肉体的なものへと変わっていった。

一方私は彼女が見せるあどけない子供らしさを愛しく思うと同時に、彼女を大人になるための踏み台に、性的快楽の道具にしたくないと、そればかり考えていた。明らかに私は自分の覚醒から逃げていた。私にとってSEXは野蛮な行為であり、聖ブラネシアンでもそう教育された。

しかしながら、私も他の旧人類同様、覚醒を避けたまま彼女を愛することができなかった。

最初、私は夢を見ていると思っていた。

彼女がワンピースを脱ぐので、私はフラスナーを下ろした。そして下まで降りた時、彼女は肩を動かし、そのためにワンピースが床に落ちた。彼女は下着だけになった。彼女は大人の女性が使う下着を身につけていた。彼女は突然私の方を振り向き、私の唇を奪った。彼女の唇はしばらくはりついていたが、すぐに離れていった。彼女は私に抱きついたままベッドに誘導した。マドレアと私は、ベッドの上で再びキスをした。

彼女は私の服を脱がし始めた。私は抵抗しなかった。二人とも裸になり、見つめあった。初めて彼女の胸に触れ、彼女の心臓の音を感じると、何故か笑いがこみ上げてきた。

「何がおかしいのよ!」

彼女は不機嫌そうに言った。

「たしかあなたはいつも夜になるとオナニーしていますね?」

私がそう言うと、途端に彼女の顔が赤くなった。

「そして、ここをこうやっていじっている。」

私は、彼女のクリトリスをぐりぐり撫で回した。

「いやっ!」

彼女の股間がびくつと動いた。

「どうして私のことを考えながらこんなことを?」

「だって…好きなんだもん。」

彼女は口元に手を持ってきて、甘ったるい声を出した。

「普段あなたは私の目の前でよく私にレイプされているシーンを思い描いていましたね?」

「言わないで!」

マドレアは恥ずかしそうに目を伏せた。

「どうしてあなたはこーゆうポーズをされたまま喜んでいたのですか?」

私は調子に乗って彼女の足を持ち上げ、彼女の性器を天井に向け、舌で陰唇をゆつくりとなぞった。

「いやあああああっ!やめて!」

彼女は足をバタバタさせて泣き叫んだ。しかし、それは喜んでる叫び声で、もっとそうしてほしいというサインだった。私は彼女の中から熱い蜜が込み上げてきているのを見た。

「セヴァスチャンのエッチ!覚醒しちゃうよ?」

「もうしていますよ。」

私は彼女のかわいい口に、自分のペニスを押し込んだ。彼女はよく無理矢理私のペニスを口の中に入れられ、苦しんでいる姿も思い描いていたのだ。彼女は泣き叫ぶどころか、舌を動かし、刺激し始めた。

彼女は足をクロスさせ、私は彼女の股のすき間にペニスを入れ、腰を動かし、女性器にこすりつけた。

「あーん、セヴァスチャン、とろとろになってきたー。もうだめ！入れてよん！」

普段ニコルとフレッドがしている会話を、彼女は無意識のうちに再現していた。彼らの行為を軽蔑しながらも、彼女の最近の関心事は全てSEXであり、私に会うたびに彼女の体は熱くなっていた。私がしたこれらの行為は、全て彼女が普段から妄想していたことだった。「あなたは私の目の前でSEXしている場面を想像し、同時に私を挑発していたのです。いけない娘ですね。何時からこんなに淫乱になったのですか？」

「セヴァスチャンに逢った時から！」

私が彼女の中に入れ、動かそうとした瞬間、

「痛いっ！」

と彼女が叫んだので、抜いた。

一気に夢から覚め、正直驚いている。彼女の痛みが、自分の痛みのように心臓を突いた。旧人類は人の心が読めるが、相手を感じた痛みがここまで強く伝わったことは、今までなかった。

彼女の両目から涙が溢れ出てきた。

「…マドレア。」

彼女は十五歳の誕生日に、処女を失った。同時に私は覚醒した。

フレッド4

マドレアは朝早く帰ってきた。ブルーベリと一緒にだった。昨夜は彼女のために家族皆でパーティーの準備をしていたのに、彼女は帰ってこなかった。しかも、ブルーベリの屋敷で一夜を過ごしていた。前にもこんなことがあったが、今回は家出して、朝帰りする理由がなかった。ニコルが妊娠している以上、彼女とSEXして大きな音をたてることもなかった。

ブルーベリは軽くお辞儀し、二言三言言って帰っていった。マドレアもグツタリしていて、学校にも行かずに寝始めた。

びよん吉3

「兄さん。ついに覚醒しちゃったね、僕哀しいよ。」

「ごめん。」

「何で謝るの？兄さんもやっと幸せになれるじゃない。」

「そうだね。」

「うれしくないの？」

「うれしいさ。ただ、昨晚のSEXで自分でも知らなかった自分が顔を出したみたいで…」「覚醒するってそういうことじゃないの？それでも兄さんだっただけには変わりはないよ。」

「びよん吉も私の弟だっということには変わらないのと、同じか…。」

「そうだね。」

僕たちは、笑った。あと何年、こうして兄さんと一緒にいられるのだろうか。

「父さんは元気にしている？」

「うん、相変わらずだよ。」

「そうか、変わっていないのか。」

「兄さんが父さんの話するのって、何十年ぶりだろうか？」

「そんなにしていなかったかな？」

「していなかったよ…。ごめんね、兄さん。こんな広い家に一人で残しちゃって。淋しかったでしょ？」

「だいぶ前に慣れたよ。」

「でも彼女は兄さんの世界に入ってきた唯一の女の子だったね。」

「うん。毎日数時間しか一緒にいなくても、彼女のいる世界と、一人だけにいる世界とでは、光の当たり方が違った。」

「彼女は光なの？兄さんにとって。」

「そんなもんだよ。」

フレッド5

僕が印刷所から家に戻り、マドレアの部屋のドアを開けると、彼女は大きなバッグに荷物を詰めていた。

「何しているの？」

「何って、出て行く準備よ。」

彼女は次々と荷物を詰め込んでいった。

「まさか、ブルーベリの所に行くんじゃないだろうな？」

「……。」

「僕は反対だよ？あんなどこ行っちゃだめだよ。」

「でも、学校卒業後はあそこで働くことになったから。」

「学校はまだ終わらないだろ？完全に終わってからにしろよ。」

「学校はセヴァスチャンの家から通うからいいの。」

「よくない！」

僕は怒鳴った。僕は彼女をあそこに行かせてはいけなと思った。

「ねえ、あそこで働くって、具体的に何をやるの？」

「何するって、掃除とか、お茶を運んだりする仕事よ。」

「ねえ、ブルーベリは200年以上も一人で暮らしてきたんだよ？マドレアが彼の屋敷のメイドになんかならなくなったっていいじゃん！」

「煩いなー、あたしはセヴァスチャン本人に頼まれたんだから！」

「パパとママには相談したの？」

「したような、していないような。」

「ちゃんと断ってからにしなよ。」

「嫌！」

マドレアはバッグのチャックを閉め、持ち上げ、肩にかけた。

「でもエルリックには言ったよ？エルリックが代わりにパパとママに言ってくれるから、あたしはこのままセヴァスチャンの所に行っていくの。」

「何でその役目がエルリックなの？」

「だって、ニコルだったらお兄ちゃんに言っちゃうだろうなって、思ってる。」

「エルリックだってニコルの一部じゃん。」

「でもいいの、エルリックで。だってニコルとエルリックが来てから、あたしなんかどうでもいいみたいに扱われちゃってさ、居場所がなかったんだもん。」

「ニコルのことそんな風に思っていたの？」

「うん。」

「…ごめん、気づかなくて。」

でもそれはあの屋敷に住む口実なんじゃないの？」

「口実なんかじゃないよ。とにかくあたしはここより、あそこがいいの。」

「もしかして、彼の財産目当て？」

「違う！単に彼の所にいたいだけだもん！」

「馬鹿！あんな所に一日中いたら何されるか分かんないよ？」

僕は彼女の荷物を取り上げた。

「返して！あたしはセヴァスチャンの所に行くの！」

「ダメだって！」

僕たちは、荷物を引っ張り合った。

「ダメじゃない！もう決めたの。ここにはもういられない！」

マドレアの声が震えていた。

「まさかとは思うけど、あいつが覚醒したの？」

僕の声も震えた。

「そんなんじゃない！」

「じゃあ、何でそんなに急ぐ必要があるんだよ！」

「あたしはもう昨日までのあたしじゃない。」

「？」

「お兄ちゃんがよく知っているあたしじゃないの。」

さようなら、お兄ちゃん。ニコルを大事にしてね。」

マドレアは僕から無理矢理バッグを奪い、走って出て行ってしまった。

マドレア 9

私が屋敷の重い扉を開けると、セヴァスチャンが現れ、バッグを持ってくれた。彼はそれを自分の部屋に運んだ。

私は部屋の中央にあるテーブルの椅子に腰掛け、彼の出方を待った。

「紅茶、飲みますか？」

「うん。」

彼は、紅茶を注いだから椅子に座った。そして、重い口を開いた。

「昨日はすみませんでした。あの後自分がしたことが恥ずかしくなって、あなたに謝りたい気持ちでいっぱいになりました。あなたを傷つけるつもりはなかったのに…結果的にあなたを傷つけてしまいました。どうもすみませんでした。」

彼は昨日のSEXのやり方について謝っているようだった。私が処女膜が破れて痛がって泣いていたのを見て、罪悪感を覚えたのだろう。

「…でもこれだけは信じてください。私はあなたを愛していますし、全てを捧げたいと思っていますのです。」

「今日もSEXするの？」

「はい。」

「嫌だっって言ったら？」

「しないわけには…」

「昨日みたいに痛くしないでね。」

その夜、私はセヴァスチャンにじっくり愛撫してもらい、昨日とは全く違う愛され方をされた。私は彼に愛されていることを全身で感じた。昇天の際、彼の名前を呼び続けた。

「マドレア、愛しています。私のマドレア…」

彼はよくそう言いながら私を抱いた。

セヴァスチャン 8

フレッドが18歳になる数ヶ月前にニコルは子供を産んだ。男の子だった。ニコルの種族は男しか生まれないらしい。マドレアが赤ちゃんを見たいと言い出し、一度は止めたが、彼女がすぐに帰ると言ったので、そのまま行かせた。

しかし、一週間たっても彼女は帰ってこなかった。

私は彼女に覚醒した後の旧人類の危険性について十分なほど説明したつもりだった。一日でもSEXを欠かしてはいけないと、何度も言ったはずだった。

フレッド 6

印刷所の中には、僕とエルリックだけがいるわけではない。印刷機を動かす人が何人もいる。僕とエルリックはただ、彼の日記を編集し、印刷を指示しているにすぎない。

時々ヴェーベリが顔を覗かし、嫌味の一つでも言ってくるのだが、この5日間、彼は姿を現さなかった。

仕事が終わわり、エルリックと二人でブルーベリの様子を見に屋敷へ行った。

彼の部屋まで来ると、彼が床にうずくまっているのが見えた。急いで彼を起こすと、彼の顔は真っ赤で、おまけに息遣いが荒かった。僕は彼をベッドまで運んだ。

「彼は、どうしちゃったんだろう？」

エルリックにもよく分からないようだった。

「発情しているんだよ。」

振り向くと、びよん吉が立っていた。

「ほら、旧人類って覚醒後は毎日SEX三昧じゃない？でも彼は1週間もやってないんだよ。それで具合が悪くなっちゃったって訳。」

薄々気がついてた事だが、マドレアはブルーベリーとSEXしていた。彼女の彼への惚れ方は異常だったと思っっている。彼らは、自分とニコルのような瞬間接着剤みたいな恋ではなく、長期間に渡る交際の後に肉体的な関係に踏み込んでいる。だから二人の愛は本物だし、彼らがSEXしていても、今更文句は言わない。

だが、それにしても、1週間やらないだけでこうなってしまう旧人類は哀れだ。

びよん吉は、ブルーベリのズボンと下着を下ろし、チューブから出したクリームを両手に塗りたくり、べとべとした手で、ブルーベリのペニスをしごき始めた。

僕もエルリックも顔を赤らめながらもその様子を見ていた。

僕はその時初めてブルーベリーにペニスがついていることを知った。彼は顔立ちが整っていて、肌も白く、女との区別がつかなかった。最初、僕は子供サイズのペニスで何ができるのかと、疑問に思っていた。そんなものを入れたって、快楽など得られないと思っっていた。疑問に思う一方で、この事について話し合う人はいなかった。エルリックも元はニコルと同一人物だし、妖精と旧人類とでは勝手が違うらしいので、聞けなかった。セヴァスチャン本人には、絶対聞けなかった。だが、僕が分かったことは、旧人類が覚醒し、大人になる時、性器から大きくなるらしいということだ。それと、男は初めてでも、膜を突き破る程度に大きくなるらしい。だが、その時すでに精子が出るようになっていのか、女の方はどうなっているのか、詳しいことは分かっていない。

びよん吉は、うなり続けているブルーベリーをうつぶせにし、バイブレーターに薄い膜を被せ、それを肛門に差込み、スイッチを入れた。ブルーベリのうめき声が一層激しくなった。

目の前ですごいことをしているウサギがいるのだが、僕とエルリックはそれを止めようとはしなかった。

「ねえ、フェアリーランドでは、SEXの時に使うアイテムがあるの？」

「…僕は何も知らないから。」

しばらくすると、ブルーベリの発作もおさまった。びよん吉は手を洗いに行ったまま、帰って来なかった。

「…マドレアは？」

ヴルーベリは目を覚まし、僕たちを見るなりそう尋ねた。

「いないけど。」

「今彼女はどこに？」

「家だと思う。」

ヴルーベリはゆっくり起き上がり、隣の部屋で着替えを始めた。そして、再び姿を現した時にはいつもの彼だった。彼は何も言わずに部屋を出て、家を出た。僕とエルリックが後を追うと、彼は走り出した。

彼は見た目によらず足が速かった。父親や弟がウサギなだけあって、速いのだろうか？彼は息を切らしながら僕の家飛び込み、両親やニコルたちと楽しそうに話しているマドレアの前に出た。

「セヴァスチャン！」

マドレアは彼に会えて嬉しそうに笑った。ちょうど彼の話をしているところだったのだ。ヴルーベリは椅子に座っている彼女の足を上げ、パンツを下ろし、自身のも下ろし、ペニスの挿入をした。そして、激しく腰を振った。マドレアは叫び声をあげた。その叫び声は泣き声に変わった。赤ん坊も驚いて泣き出してしまった。だが、ヴルーベリは満足するまで腰を振り続けた。彼は相手方の両親が見ている前で、娘を犯してしまったのであった。

「なにやってんのよ！」

母がバケツの水をかけたので、ようやくヴルーベリはおとなしくなった。マドレアは、彼につかまれていた足を床に下ろした。彼女は両手で顔を隠して泣いていた。ヴルーベリはズボンを上げると、周囲の冷たい視線に気がつき、辺りを見回した。彼はもうだめだろうと思った。僕は彼が嫌いで、憎んだこともあったが、今は同情している。マドレアは今度の件で、ヴルーベリを嫌いになっただろう。

びよん吉4

その場の空気は、凍り付いていた。兄さんは顔がずぶ濡れになったまま、その場に立ち尽くしていた。

「あんたがセヴァスチャン・ヴルーベリ？」

マドレアの母であるエクレアは口調からして怒っていたが、無理もなかった。

「はい、セヴァスチャン・ヴルーベリと言います。」

「それじゃあ、息子の学校の校長兼、所有主で、学校内に教会、売店、食堂、図書館、体育館、印刷所、学生寮等を持っていて、近所にある豪邸に一人で住んでいて、付近一帯の広大な土地を所有していて、その土地の上に立っている建物全てから定期的に土地代を頂いている金持ちってあんたのこと？」

「はい、随分くわしいですね。」

「そんなのこの辺に住む人にとっては常識なの！」

で、そんな人が何でうちのマドレアを襲ったの？」

「どうもすみませんでした。心から反省しています。もう二度とこのようなことがないようにします。」

「悪いけど、二度目はないわよ。」

「どういう意味ですか？」

「あんたはマドレアと別れるの！」

兄さんは青ざめた。

「何言っているのですか、私は彼女と結婚しますよ！」

「ダメよ！」

「何故です？」

「不釣合いなのが分からないの？」

あんたみたいな桁外れのお金持ちと、平民で、しかも顔も十人並みのマドレアとじゃつりあわないでしょ？」

「ひどく！人が気にしているのに！」

マドレアが泣き叫んだ。

「あんた、騙されているのよ！」

エクレアは声を張り上げて言った。彼女は興奮していた。

「こんなお金持ちで、顔もいい人が、何のメリットもなしにあんたなんかと結婚するわけないじゃない！」

「ママひどい！セヴァスチャンはそんな人じゃないもん！」

「あんたに何が分かるっていうのよ！」

「ママはもつと分からないじゃない！」

「私は…損得を考えて彼女と結婚するわけではありません。」

「でもこの娘は財産目当てであんたに近づいているのよ！」

「違うもん！」

「違くないわい。いい？この女と結婚するということは、伝統あるヴルーベリ家が存続の危機に見舞われると言うことよ！」

「ヴルーベリ家など、父がこの家にやってきた時から、終わっていますよ。私はそんな事は気にしていません。ヴルーベリ家が滅んでも滅ばなくても、私にはどうでもいいことなのです。」

「あんたはマドレアと結婚したいから、今だけそんな事を言っているんだわ！」

「それは違います。」

「違くない！」

エクレアは狂っていた。彼女の夫である、ハドロンは、その間何もせず、ただ、様子を見ながっていた。今、下手なことを言うと、火に油を注ぐことになりかねないと、彼なりに考

えていた。

「とにかく、もう二度とお互いに会わないって約束して！」

「ちよつと待ってください！」

あなた方の目の前で娘さんを犯したことは謝ります。しかし、覚醒後の旧人類にとって、毎日SEXをしないということは、トイレに行かないのと同じくらい体に負担がかかることです。私は一週間も彼女とSEXすることができませんでした。一週間もトイレに行かない人などいないはず。さっきの私は限界でした。我慢できなくて、彼女以外のものが見えていなかったのです。どうか許して下さい。」

セヴァスチャンは、手をつけて謝った。そして、ゆっくり起き上がると、エクレアは、こう言った。

「ダメ————！」

僕が家の中に入って来たのは、ちよつどその時だった。

「みなさん、こんにちは！元気でやっていますか？」

「あんた誰よ？」

「びよん吉です！」

僕は帽子を取り、うさ耳を見せ、お辞儀をした。

「この度は、兄さんがお宅の娘さんと結婚する事になったので、挨拶に参りました。

どうか、兄さんをよろしくお願いします。」

僕は再び深くお辞儀をした。

「つまらないものですが、受け取って下さい。」

僕はエクレアに箱を渡した。

「いらないわよ、こんなもの！」

彼女は、僕の手から箱を振り払った。箱は床に落ち、中身がこぼれた。僕は紙でできた箱の中に、雪ウサギを入れておいたのだ。

「ああっ！せっかく作ったのに！」

「なんなのよ、この子は！」

「私の弟です。」

「バツカじゃないの？本当につまらないものを出す人がいる？」

「ひどく！そんな、はっきり言うなんて。」

「びよん吉、来る時を誤ったんだよ。」

兄さんは小声で言った。

「…兄さんが余計なことするから。」

「そのことは何度も謝っているんだから、もうこれ以上言わないでくれ。」

「何言っているの？あたしは何度でも言うわよ？」

目の前で娘がレイプされたのに、黙っている親なんているわけないでしょ？

あんたも何か言つてよ！」

エクレアは、夫の顔を見た。

「…確かに、レイプは許されない行為だ。しかしマドレアは以前から彼と交際していたし、肉体関係にまで発展していた。俺は旧人類じゃないから毎日SEXする必要はない。だが、彼にしてみればこの一週間は拷問に近かったんじゃないか？もっと早く屋敷に戻らなかつたマドレアも悪いし、引き止めた俺たちも悪いと思うんだが、どうだろう？」

「何言ってるんのよ！そんなんじゃないや、ダメよ。もっとうガツンって言つてあげなくちゃ！」
エクレアは、どうすれば兄さんがマドレアを諦めてくれるのか、考えていた。

「あなたは結局私にどうして欲しいのですか？」

「今すぐマドレアと別れなさい！」

「できません！」

「いいから別れなさい！」

「ママ、いい加減にして！」

あたしは彼が好きなの！ずっと、ずっと好きだったんだからね！彼と離れるくらいなら、死んだほうがましよ！」

マドレアは訴えるように言った。

エクレアは、しばらく二人をにらみつけていた。そして、大声で怒鳴りつけた。

「出て行きなさい！」

そしてさっきの雪ウサギを兄さんに投げつけた。

「兄さん大丈夫？」

「……」

「じゃあもうこの家には二度と戻って来ないからね！苗字も今日から『ブルーベリー』になるんだから！」

「ふん、やれるもんなら、やってみなさいよ！あんたなんかすぐ捨てられるわよ！」

「もうっ！ママなんか大っ嫌い！」

セヴァスチャン、行きましょ！二人だけのお城に！」

マドレアは兄さんを引っ張るようにして家から出た。

エクレアは、彼らの後を追って外に出た。僕たちも後に続いた。マドレアは振り返り、母を見た。

「あんた、結婚式は何時するのよ！」

「何時って…」

「早急に、準備します！」

セヴァスチャンは言った。

「そう、挙式するつもりでいたのね。どこかのバカカップルみたいに子供は作っても式は挙げ

ないのかと思ったわ。」

「ふれつどくお！何か言ってるよ？」

「……。」

結局、彼らの結婚は許されたのだった。

「エレン、結婚に反対じゃなかったのか？」

彼女の夫は聞いた。

「はあ？何言ってるの、反対なわけじゃないでしょ？玉の輿に乗れるなんて、こんなチャンス滅多にないのよ！それに彼、なかなかかっこいいじゃない？もう、うつとり。目の保養になりそう♡」

エクレアは一人ではしゃいでいた。

「…結婚に賛成なら、あんなに言う必要なかっただろう。」

「何言ってるのよ！二度とこんなことがないようにきつくお仕置きしておく必要があったのよ！息子になる人なら、尚更じゃない。」

「本気で怒っていなかったか？」

「しーらない！もう済んだことなんだから、いいじゃない。」

「二人が本当に別れていたらどうしていたんだ？」

「そんなことない！障害があればあるほど燃えるのよ、恋は！」

エクレアは笑った。

「でも毎日SEXするなんて、あいつには無理だ。多分。」

「煩いわねー。そんなの鍛えれば何とかなるわよ。一日中SEXしているわけじゃないんだし、大丈夫よ、若いんだから！」

「あのく、マドレアのお母さん。」

「あら、うさ太郎、まだいたの？」

「びよん吉です。」

兄さんから伝言を頼まれていたんですけど、いいですか？」

「何よ？」

「もしよかったらでいいんですけど、皆であの家で暮らしませんか？皆さんがあそこに住んでくれたら、少しはあの家も明るくなると思うんですけどね。兄さんは僕と違って人間ですけど、一人が淋しいらしいんですよ。孤独死しちゃったりなんかして。ウサギなんです、彼も。あ、これ兄さんには決して言わないでくださいね？」

僕がそう言い終わると、エクレアは、再び立ち上がって言った。

「荷造りの準備をするわよ！」

「ええ〜！ヴルーベリと同じ家に住むの？」

フレッドは不満そうに言った。

「あんた、こんなチャンス滅多にないんだからね！」

エクレアは、自分が生まれ育った家を立ち去るのには抵抗があったが、それ以上にあの豪邸には一度住んでみたかったので、張り切っていた。

「あ。それとね、フレッドとニコルの結婚式も行えるように、セヴァスチャンにお願いしておいてくれる？」

こうして、二組のカップルが、同時に結婚することになった。

マドレア10

私は、屋敷に戻り、二人でお風呂に入った。彼が母に水をかけられたので、着替える必要があったのだ。

「さっきはごめんね、セヴァスチャン。ママ一度怒るとなかなかおさまらなくて…」

「でも、それだけ大切にされているって事ですよね。」

セヴァスチャンは言った。彼が母のことを根に持っていないようで、うれしかった。

私は彼にキスされた。そして、湯船の中でSEXした。

「ねえ、こうやってしていると愛し合っている行為なのに、さっきのはレイプって言うんだね。もしもこの屋敷の中でいきなりあんなことされたら、SEXになるのかな？レイプになるのかな？」

「…私が一方的にこのようなことをしている所為で、SEXとレイプの区別がつかなくて、すみません。」

「あやまらなくていいから…セヴァスチャンにはもつともつと愛されたいから…愛して！」

私がそう言いながら昇天すると、彼は微笑んだ。

「いつの間にか立場が逆転していますね。昔はあなたが私を求めてこの屋敷にやってきていたのに、今は私があなたを求めている。」

「ねえ、それはセヴァスチャンが覚醒したのとは無関係だよね？」

「私は例え覚醒しなかったとしても、あなたを求めていますよ。あなたを待ち続けて、300年以上の時を生きてきたのですから。」

「あ〜ん、もう一回言つて！」

私がそういうと、彼はキスで私の口を塞いだ。

フレッド7

あの事件から一カ月後、マドレアとヴルーベリ、僕とニコルは同時に結婚式を挙げた。これからはヴルーベリではなく、セヴァスチャンと呼ぶことになるだろう。ヴルーベリという苗字は学校名にもなっているし、彼の所有している土地にもヴルーベリという名前がついて

いたので、ブルーベリの方が言いやすかったのだが。

僕たちは聖プラネシアン・ブルーベリ男子学院に付属している教会で挙式した。ニコルは式の間中大人の姿をしていた。それでも10代半ばにしか見えなかったが、普段の彼女は10歳くらいの子供にしか見えないので、彼女なりに気を使ったのだろう。

式に来るのは、家族だけだと思っていたのだが、ブルーベリ男子学院の先生一同と、強制的に参加させられた初学部の学生全員と、呼んでもいないのに元旧友たちが見に来ていたので、気まずかった。

マドレア11

私は20歳の時にセヴァスチャンの子供を産んだ。女の子で、後々旧人類であることが分かった。彼女は『マリーナ』と名づけられた。マリーナは兄の息子のスターリングより4歳年下だった。マリーナが8歳の時に未来人が家族の一員に加わった。そしてマリーナが11歳の時にニコルの消滅の危機がやって来たが、スターリングのおかげで、ニコルとエルリックは消えずにすんだ。

さて、セヴァスチャンはどうなったのかと言うと、彼はマリーナが15歳の時に、天に召された。私は35歳だった。旧人類としては長生きした方だ。私は最初、子供ができた後の旧人類は、急速に年をとるものだと思っていたが、彼の老いは緩やかで、私と大して変わらなかった。それが、妖精のハーフである彼だからこそできたのかは分からない。ただ、彼は最後まで綺麗で、夢でも見ているような顔で眠っていた。

私はセヴァスチャンの葬式の間中泣いていたのだが、それ以上に泣いていたのがびよん吉だった。彼の泣き声はあまりにもうるさくて、それを見て笑っている人もいたし、途中から夫の死を悲しむどころではなくなってしまった。

「ねえ、もう少し小さな声で泣いたら？」

「嫌だ！」

「何だよ。」

「だって、じゃなかったらマドレアが一人で悲しんじゃうじゃん。」

「あたしのためだって言うの？」

「兄さんのためだよ。」

「…ありがとう。」

びよん吉は式が終わると、すぐに泣き止んだ。

「びよん吉はこれからどうするの？」

「フェアリーランドに帰るさ。」

「そう、残念ね。」

「何で？」

「だってここはあたしたちの家である以前にあなたの家なのよ？また遊びに来てよ。」

「嫌だね。」

「どうして？」

「そうゆう思わせぶりな事言わないでくれる？兄さんがいなくなって淋しいのは分かるけどいい。」

「誤解しないで！そうゆう意味で言ったんじゃないわ。」

「知ってるよ。でもごめん。」

びよん吉にはセヴァスチャンの葬式以来会っていない。だが、セヴァスチャンの墓に行く
と、決まって花が供えられているので、頻繁にこちらの世界に来ているのかもしれない。

セヴァスチャンの死後、ブルーベリー男子学院の校長には、フェイイルヴェルクがなった。
彼には2千年以上生きて培われた知恵があるし、不死身なので、安心して学校を任せられる
と判断したのでだろう。しかし、その一方でエルリックは兄と共に、セヴァスチャンの書いた
日記の編集に明け暮れていた。私が生きている間に、完結して欲しい。それと、もうすぐニ
コルに二人目が誕生する。スターリングはそれが原因で未来人と家出したりしたが、セヴァ
スチャンを失った私にとって、新たな命の誕生を見るのは、嬉しいことである。

もし私がこの屋敷を訪れることがなかったら、今頃私は別の人と結婚していたかもしれないな
いし、家族とは一緒に暮らしていないだろう。セヴァスチャンの世界に無理矢理入ってきた
私に対し、彼はいつも私を暖かく迎えてくれたし、受け入れてくれた。まだ私が少女で、彼
がいたあの頃は、私にとって永遠に色あせることのない思い出だ。私は当時、この屋敷の中
で、彼と永遠を生きていたのだから。